

の高い女性ってキャラクターに行き着いたときに、「あっ、これは描ける」という気が非常にしました。歴史的に描写が少なく、勝手に描いたという中で非常にはまった感じがします。「波弦屋島」を描いている時は、好きでしたね。

宇都：劇中で萌子に大鎧の「弦走韋（つるばしり）のかわ…胴体の部分の名称」の模様を描かせたシーンがありましたが、最初からそのような構想があったのですでしょうか。

北崎：いや、ないです。絵を描く女性という発想は、「波弦屋島」になっ
てから思いつきました。始まる直前まで那須与一もどう描こうというこ
とは決め切れていなかったですし。

宇都：確かに「ますらお」に掲載されているラフスケッチとは違いがあ
りますよね。私は個人的に「波弦屋島」の与一は好きです。



©北崎 拓

那須与一「ますらお 秘本義経記 - 波弦屋島 -」より

北崎：那須与一っていきなり歴史にでてきて、弓を討って名を残して。実際にいたかどうかも怪しい。なので実在したかわからないから「どう描いたっていいや！」って開き直った部分もありました。

宇都：萌子の髪型が不細工という描写がありました。男衾三郎絵巻からヒントを得たのでしょうか。

北崎：いや、単純に髪の毛が縮れているというのは、醜女の表現で昔からあって、そのまま取り入れました。現代では、かわいいという表現方法でもあるのですけどね。

【大姫と清水冠者義高】

宇都：源頼朝の長女・大姫とその婚約者である清水冠者義高を描きたいって「ますらお」の時に仰っていました。「ますらお」の続編として大姫を主人公とした「ますらお 秘本義経記 - 大姫哀想歌 -」以下、「大姫哀想歌」と略し「から始まりましたが、最初から編集の方には大姫の話から続編を始めたいと仰ったのですか。

北崎：そうですね。「ますらお」の連載終了から時間も経っていてもう描くことはないのだろうなと思っていましたし、60歳を過ぎて、漫画家を廃業するころになれば、同人誌にちよこちよこだして楽しめるようになればいいなという感じでいたのですけれども。今の編集長さんが「ぜひ続きを読みたいんですよ」と声をかけてくれたので。

単行本一冊くらいの気持ちで始めて、半年くらいの連載だろうなというのはあったので、それでまとまるのは大姫の話だろうな。なので、



大姫と義高「ますらお 秘本義経記 - 大姫哀想歌 -」より

これで最後かもしれないとも思ったので、義経の最後とか義経が死んだ後の話とかも含めて源義経の話ってこうなるのですよと。それであわよくば次の屋島編に続けばいいなという感じで。あそこで終わってしまったとしてもしょうがないという感じでやりました。

宇都：「大姫哀想歌」の単行本の最後がカラーじゃないですか。だから「屋島編にいくぞー」ということが決まっています、そのためのカラーなのかと思うっていたのですが、決まっていなかったのですね。

北崎：決まっていなかったですね。途中から続けてやってくれているといいよとは言ってくれていたのですが、次の連載も決まっていたので、いつから始めるかわかりませんという感じでした。

宇都：それでは壇ノ浦編というのも機会があったら描かれるのでしょうか。

北崎：それはやりたいと思っていますね。今の段階では、編集長がそのままなので、できるだけやらしてくださるとは仰っているので。そういう風な話があるうちにやりたいなどは思っています。ラストも自分の中では決まっているし、担当さんとも最後はこんな感じとは話してはいるのですよ。ただそこにいたるまでに壇ノ浦編があるので。

宇都：「波弦屋島」は二〇一五年に単行本の一卷が出版、最終巻の5巻が今年の1月に出版されました。

北崎：そんなにかかったのですね。7年くらいかかっているのですね。

宇都：私をはじめ、ファンはすごく嬉しかったと思います。私の場合、インターネットや先生のSNSなどをチェックしているのですが、ある日「大姫哀想歌」出版と見て感動したことを覚えています。

北崎：ありがとうございます。

【平安京・鎌倉・平泉のイメージ】

宇都：ちなみに藤沢市には義経伝説や那須与一の伝承があります。なので今回義経のミニパネル展示を開催すると決まった時にぜひ先生とアポを取りたいと思いました。まさかここまで小さなミニパネル展示にご協力いただき、色紙まで描いていただけたとは思いませんでした。

北崎：ありがとうございます。大河ドラマ「平清盛」の時もそうでしたし、もう一度チャンスがこないものかと思っていて。前回大河ドラマに義経が出たときに文庫本で出してもらいまして。その時にもう描くことはないのだから、最後の数ページをダイジェストみたいに描いちゃおうかなとも思いました。ただ、インターネットか何かで、悪口みたいな記載があつて、そんな風に言われるなら描かないよつてなつて（笑）。

この前の「平清盛」があつたときに、本当に面白くつて満足してしまい、もう描かなくていいやつてなつてしまいました。あんなに平家物語のロマンの部分をつましく吸い上げて解釈して。よくできているなつて思いました。あの時にゆうきまさみ先生など漫画家さんの反応もすごく、合同誌を作ろうつてなりまして僕も描かしてもらいました。本当に好きでした。劇中の画面が暗いとか、汚いなどという批判がありましたけど、平安京など実際もそうだったのでしょね。

宇都：もう亡くなりましたが、中世史の大家である石井進先生が「都市鎌倉における「地獄」の風景」という論文を書かれています。東日本最大の都市となつた鎌倉にはどのような風景が広がつていたかを考察されているのですが、それを読むと視覚的にも嗅覚的にも現在の私達からしたら想像を絶するような風景が広がつていたと思います。平安京も似たような様相だったかもしれませぬ。

北崎：それであつても、奥州の平泉はここだけは美しかったのではないかとイメーヅがあります。今も静かできれいなところですけど、ここに鎌倉と京と3つに分けるような国があつて、あの雪深いところに毛越寺が造られていることを想像すると、とてつもない財力があつて、文

化があつて、そこにすごいロマンを感じます。金色堂の部材に外国製のものがあるというような話を聞くと、あの時の文化の流通を含めて私たちが想像している以上のものがおそらくあつたのではないかと想像します。

「ますらお」シリーズの中で、佐藤継信・忠信兄弟を描いたのですが、中国の服を着せてみました。なぜかというとな当時の最先端のファッションが平泉に集まっていたのではないかと思つたからです。藤原秀衡自体は日本の恰好で描きましたが、あそこにいる若者は最先端のファッションをしていたのではないかというイメージなのですよね。

【藤沢市のイメージ】

宇都：話は少し変わりますが、「ますらお」連載の後、再び恋愛漫画「なぎさ」の公認（以下「なぎさ」と略）を描かれていますよね。その中で藤沢市も描かれています。当時、藤沢市にどのようなイメージがありましたか。

北崎：藤沢市のイメージは江ノ電がはしる街というイメージが強かったですよね。あと江の島というイメージは強いです。江の島は海があつて波があつて。人目から隠れる洞窟とかもあつて。さらには近くには水族館もあつて。ラブコメを描くには非常にいい場所なのですよね。「なぎさ」だけでなく最近の恋愛漫画でも使いました。

宇都：劇中では藤沢駅南口で待ち合わせする描写や、主人公が龍口寺前付近で江ノ電と追いかけてっこしているシーンなど、藤沢の街並みの描写見られます。非常に忠実に描かれています。藤沢市に取材に来られたのでしょか。

北崎：はい。「なぎさ」は江ノ電沿線が物語の舞台なので、風景を当時の担当さんと一緒に調べながら歩き回りました。

【仕事をすするうえでの心がけ】

宇都：最後に先生が仕事をさせているうえで、一番大切にされていることを教えてください。

北崎：そうですね。過信しないことというか、常に自分を疑うことですかね。例えば、絵に関して昔より描くのが早くなっても、それは上手くなってきたからと思う前に、「実際の自分はどんどん加齢している目も手も衰えているのだから自分の身体を守るために何かを省いているので



インタビューの最後に郷土歴史課学芸員と

ないか」と考えるようにしています。アナログ（紙）で描いた原稿を取り込んで完成に持っていくようにしていたのですが、大きい画面で見るとこんなに汚い線で描いていたのかとびっくりするのですよね。早くなった上手くなったと思っていたことは実は手を抜いて描いていたことに気付かなかっただけなのではと。老眼鏡をかけるようになって同じことを思っていて。なので、全範囲に関して常に疑い続けることのような気がします。

感度とか感性もいろいろ落ちてきていて。自分が面白いと思ったことが面白いとも限らないですし、面白くないと思ったことが面白くないとも限らないし。常に考えていますね。私には息子がいるのですけれど、彼らを買ってきたライトノベルを見てみると、どれもこれも同じ絵だなんて思ってしまうことも少しあるのですよね。でもそれって自分が中学生高校生の頃に親に言われたことなのですよね。だから、それは自分の感度が鈍っているだけだと。息子は、こっちはうまいけど、こっちは下手だとか見分けているわけですから。それは、やっぱり、常に肝に銘じていますね。

宇都：本日はお忙しい中、貴重なお時間を割いていただきありがとうございます。これからも先生のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

北崎：ありがとうございます。

語り手 北崎 拓

聞き手・編集 宇都洋平（藤沢市郷土歴史課学芸員）

写真 串田 匠（藤沢市郷土歴史課職員）